

大正十一年

(二月)

一月一日 己巳 日曜 雪。

元旦の雪珍らし。朝の勤行済て、家内一同淑酒、雑煮を祝ひ、嘉辰例年の如く賑々敷事共也。其内賀客続々来る。午後ハ雪も晴れたり。

元旦の雪面白や成のとし

*淑酒 (淑酒)

一月二日 庚午 月曜 晴。

朝の勤行すまして御雑煮例の如し。賀客来る。観世元滋来りて謡初する。中野より泰、寿子、早苗も。高橋三人共、石山基陽、長尾雄、其外賀客大せい来る、津田弘孝も。夜迄賑々敷事也。

一月三日 辛未 火曜 晴。

朝の勤行例の如し。御祝繕も一同済。賀客も、名も一々不記。午餐早々、自動車にて石山氏同車にて年礼廻りする。閑院宮様 御息所拝謁、摂政宮、有栖川宮、九条公、久爾宮、梨本宮、朝香宮、東久爾宮 内親王拝謁、竹田宮、北白川宮 内親王御始、御子様御一同拝謁、東伏見宮御年賀申上而帰。四時過たれば伏見、山階宮えは不参候。

*御祝繕 (御祝膳)

*久爾宮 (久邇宮)

*東久爾宮 (東久邇宮)

(二月四日、記載ナシ)

一月五日 癸酉 木曜 雨と雪。

昼後より阪本昏に約ありて行。先ひき初にて、甘利、河鱈、鳥尾、川上、尺八の人二人も来りて面白く遊びたり。帰宅の節雪ふり、夜八時過帰。

*阪本昏 (阪本氏)

*ひき初 (弾き初)

(二月六日、七日、記載ナシ)

一月八日 丙子 日曜 晴。

本日は学校記念日祝日にて、午下一時より職員生徒参集。君か代二唱畢而、校長の諭旨もありて后、余興はしまる。当年のハよほと興味あるもの也。四時半畢る。職員一同を新年会に、華族会館にて晚餐会に招く。本年を此後の例とす。万里伯、葉室伯をも招く。来会者三十人。食事畢而福引す。九時畢而帰。

一月九日 丁丑 月曜 晴。

当校始業式執行ス。

一月十日 戊寅 火曜 雪。

此朝、大隈侯薨去ニ付御悔ニ行。中野跡見え行、正子の危険状態ニ付。然し言語も平常通りに意識もシツカリして危険の様子もなく思はれたり。親戚兄弟もみな打寄りたり。食事もすむ。

*危険状態(危険状態) *危険(危険)

(二月十一日、記載ナシ)

一月十二日 庚辰 木曜

此日も中野へ行。まだ一週間位はたもつといふ。此夕、李子も帰宅ス。夜四時位、電話にてしらせあり。車も何もなき時なりとて、然しまだ臨終の場合ではなきと思ふ。

一月十三日 辛巳 金曜

朝九時、事切れたりとて電話を聞いて、予、李子と直ニ行。正子、臨終も静にて結構ニ往生を遂けたり。実あつけなき事、いたまし事限りなく、一切無常也。予ハ夕景帰宅する。

*いたまし事(いたましき事)

(二月十四日、記載ナシ)

一月十五日 癸未 日曜 雪。

(コノ日、記事ナシ)

(二月十六日〜二十二日、記載ナシ)

一月二十三日 辛卯 月曜 晴。

月曜教授する、午下一時迄。夫より地明会ニ参詣する。五時帰。李子、夜、青山茂木氏へ行、十二時帰る。

*帰る(帰る)

一月二十四日 壬辰 火曜 晴。

火曜稽古する。

発信 神戸多田え。

一月二十五日 癸巳 水曜 晴 予記 茂木栄子告別式、午下三時より青山北町六ノ善光寺にて。

午下二時より自働車にて、予、李子と青山善光寺に行。茂木栄子の葬別に会ス。五時頃帰。

一月二十六日 甲午 木曜 晴。

巖浄院二七日法事ニ付光円寺に参詣ス。読経もありて先々無事相済。夕景、泰も来る。神代氏先々全快にて、此時、葉室伯来り、晩食を共にして十時頃迄談話して帰。

一月二十七日 乙未 金曜

金曜授業、午下一時迄。夕景より高橋弘来る。夕餐を共にして、神代氏も談話に。十一時帰。長尾氏来診ス。すみ子、李子、中謝する。

*中謝(注射)

一月二十八日 丙申 土曜 晴。

早起。神代夫婦、愈朝八時出立準備する。予、李子は、一木淑子、渡辺氏と米国に出立に付、八時より中天停車場に行、誥別ス、神代夫婦にも。九時出發す。

*中天停車場（中央停車場）

一月二十九日 丁酉 日曜 陰。夜雪ふる。

朝の勤行すむ。午下、長尾氏、すみ子、李の眡★（言十察）する。来客、一木喜徳郎氏の男昨日の御札に、小橋秀子。

*眡★（言十察）（眡察）

一月三十日 戊戌 月曜 晴。

朝の勤行済て、授業午後一時迄。

一月三十一日 己亥 火曜 晴。

朝の勤行済て、火曜の稽古する。栃木県河島芳松え小包依頼もの二箇返却ス。山県公、愈薨去せられる。

（二月）

二月一日 庚子 水曜 晴。寒甚。

朝、水道のせん氷る。毎朝同じ事。朝の勤行すむ。揮毫ものす。一日夜半、山県公の遺骸を椿山荘に移す。

*せん（栓）

二月二日 辛丑 木曜 予記 正子三七日法事、光円寺にて、午後一時より。

朝の勤行済て、佐々木氏を訪て帰。午下一時より光円寺え巖浄院の三七日法事に逢て墓参して帰。小雨あり。

二月三日 壬寅 金曜 陰。

朝の勤行済て、金曜の授業する、午後一時迄。来客、松井修徳氏。
神代より書至。節分豆まき賑々し。

新樹典侍さまより昆布と海鼠腸一桶着。
人はうか／＼しても季の廻りか真事也。此日、春の節か、初霞か（が）庭一はいにたな引たり。

*真事（まこと） *一はい（一杯）

二月四日 癸卯 土曜 晴。

朝の勤行済て、揮毫ものス。大坂府下今宮五九四ノ一日本婦人新聞社大沢つるより、予伝の草稿を伝達して、直に校正する。

二月五日 甲辰 日曜 晴。 予記 午下五時、築地精養軒結婚披露会。

朝の勤行済て、姉小路伯来。誕子の石碑揮毫依頼せらる。午下四時半、予、築地精養軒に行。九条道秀君、島津文子嬢との結構披露会にて公侯伯子の華族をあつめにて大盛会也。始、落語、次、伊十郎連の長唄翁三番、済て食堂開かれたる。食事も擲重、みな美味、さすかに九条家の催し也。九時過帰。時、斎藤仁子来りて十一時過迄。東洋婦人会欠席ス。

*誕子（延子） *結構（結婚） *擲重（鄭重）

二月六日 乙巳 月曜 晴。

朝の勤行済て、十時より午下一時迄授授（ママ）する。来客、石井はつ子、長谷川千賀子。

二月七日 丙午 火曜 晴。

朝の勤行済て、火曜稽古日ニ付教授する。

発信 多田重子、姉小路良子さま、河島芳松え。

二月八日 丁未 水曜 雨。

朝の勤行済て、揮毫ものス。終日春雨降つゝきて夜迄おやみなく、よくもふりたるものかな。

二月九日 戊申 木曜 晴。

朝の勤行済て、佐々木氏に行て帰。正子四七日ニ付、午下一時より光円寺ニ参詣。読経ニ逢ひ、墓参して帰。李子、万里小路の移転ニ付、手伝ニ行。山県公国葬祭。天気は此日此上なき朗晴也。

二月十日 己酉 金曜 晴。

朝の勤行済て、十時より午下一時迄授業ス。来客、安楽寺住職日善尼。夜、玉枝来る。

受信 神戸多田より、あなご蒲鉾着。

*あなご(六子)

二月十一日 庚戌 土曜 晴。

朝の勤行済て、紀元節祝日、職員生徒一同式場に参列。九時式事、校長勅語拝読、次、校長演舌、主事之演舌もありて紀元節之唱歌ニテ式全畢。一同え菓子を出す。五年生写真撮影。春季候長閑に、実ニ紀元節の心情、春風たうたり。

受信 有栖川宮美尾野より沖(興)津鯛着。

*式事(式辞) *季候(氣候) *たう(蕩々)

二月十二日 辛亥 日曜 晴。

朝の勤行済て、午下早々駿ヶ台田村氏病氣見舞ニ行。長子病氣も未たはかしくしからずして不逢。野田氏に逢て久々に大悦。是も尊上にて仏教のはなしにて時を移す。それより北条氏を訪ふ。留主中にて不逢。閑院宮様え参り、御息所に拝謁して種々御咄申上て夕景帰。春の気分あらはれて、いつこともなく長閑にあたゝかし。

*留主(留守)

二月十三日 壬子 月曜 晴。

朝の勤行済。朝十時より午下一時迄教授す。来客、平松理英師。

発信 葉山美尾野え。神戸多田重子え。

二月十四日 癸丑 火曜 晴。

朝の勤行済て、火曜の稽古する。

受信 神戸神代より小包もの着。

二月十五日 甲寅 水曜 雨。

朝の勤行済。午下草々、宮城え御機嫌伺ニ参る。皇宮陛下ニは御風気さまにて未たおかり床に成らせられ候御様子ながら、花松のすけさまニ御目にかゝりて種々御咄し共同ひ候。御合物結構ニ戴きて退出いたし候。此日、李子、中野え御退夜ニ参る。雨甚し。十一時帰。

*午下草々(午下早々) *すけさま(典侍さま) *御退夜(御逮夜)

二月十六日 乙卯 木曜 雨 終日雨甚し。

朝の勤行済で、佐々木氏え行而帰。午下一時より光円寺え参詣する。巖浄院五十日引上法事執行。読経にも逢て、菓子、及折詰ものも出て、参詣人も大勢にて先々盛也。四時済て帰。

二月十七日 丙辰 金曜 晴。

朝の勤行済で、金曜の授業する。

二月十八日 丁巳 土曜 晴。

朝の勤行済みで、学校授業午下一時迄。午下堀田伯え行、四時過帰。夜、斎藤仁子来る。晚餐を供にする。十一時帰。この(日)姉小路え病を問ふ。伯ハ北条氏え行て不在中。河鱈子に病を問ふ。是も先全快にて大ゐに安心々々。

*供にする(共にする)

二月十九日 戊午 日曜 晴。

朝の勤行済。李子、徳川秋庭様の御一周忌に参詣する。酒井喜美子さま、自動車にて迎ひに御出にて同車する。泰、忌明御礼に来る。

発信 葉山行在所、葉山有栖川宮、神戸多田氏え。

二月二十日 己未 月曜 晴。

朝の勤行済で、授業午下一時迄。本日ハ丸の内永楽町工業倶楽部ニテ代用食糧奨励会に出席ス。洪沢子爵会長にて外米及正搗米の宣伝演舌ありたり。農商務大臣、市長後藤氏、坂谷氏其外の

演舌有て、大ゐに奨励すへき事也。六時半より会食、御馳走也。実に満場一致、外国米の宣伝大賛成。九時帰。

二月二十一日 庚申 火曜 晴。

朝の勤行済て、火曜の稽古する。

二月二十二日 辛酉 水曜 晴。

朝の勤行済。午下より河鱸子二行。一月以来初稽古日にてみなく打寄たり。夜八時過帰。夕景、小雨ありて止。

二月二十三日 壬戌 木曜 晴。

朝の勤行済て、佐々木氏え行而帰。午下、泰、寿子、早苗、長尾雄来る。夕景帰。夜、甘利氏一月よりはしめて稽古する。十時帰。今朝零時十分死去のしにて、李子、広岡氏え行。来客、浦月子。

*死去のしにて（死去のよしにて）

二月二十四日 癸亥 金曜 晴。63（度）。

朝の勤行済て、授業十二時迄。

発信 千葉県塚本え。高知県青眼林山本氏え小包出ス。

二月二十五日 甲子 土曜 晴。70（度）。

朝の勤行済。本日にて新入生試問済。

二月二十六日 乙丑 日曜 晴。

朝の勤行済。来客、高橋弘、建を連て。晩食を共にする。

二月二十七日 丙寅 月曜 雪。

朝の勤行済て、五年生授業ス、午下一時半迄。来客、桐島光子。早朝雨、後雪になりて終日よ

すから降続きて世界白銀となる。普選案討義の第四日目。天雪をふらす。さも有へし。

*普選案討義(普選案討議)

二月二十八日 丁卯 火曜 晴。

朝の勤行済て、火曜の稽古する。普選法案、遂に死産。

(三月)

三月一日 戊辰 水曜 晴。

朝の勤行済て、電話にて、河鱸子俄にさし支にて鳥尾氏へ行、夜六時比帰。

*さし支(差支)

三月二日 己巳 木曜 晴。

朝の勤行済て、佐々木氏を問て帰。三条家に千代様ニ御咄し申上る。末子さまの御縁談ニ付、上杉家よりの申込を御相談申上而、夫より閑宮様え参り、御息所に拝謁して末様の事を申上而帰。今晚、甘利氏来る。姉小路伯も来る。石川房子、子供と共に暇乞して横浜え帰る。

三月三日 庚午 金曜 晴。

朝の勤行済て、授業午後迄。

(三月四日〜九日、記載ナシ)

三月十日 丁丑 金曜 予記 午後五時半、築地精養軒ニ而荘原和作、属松子と結婚披露会。

(三月十一日〜二十日、記載ナシ)

三月二十一日 戊子 火曜

此日より庭の桜花咲出したり。当年ハ例より早く、十二、三日早過たり。

(三月二十二日～二十五日、記載ナシ)

三月二十六日 癸巳 日曜 予記 中山孝治、斎藤郁子、結婚披露、午下四時、帝国ホテルにて。

三月二十七日 甲午 月曜 晴朗。

朝の勤行済。本日三十五回の卒業授与式執行。午後一時より式例の如し。卒業授与済で、万里伯祝文朗読、次、島田三郎氏演舌、井上角五郎氏、外に一人演舌者ありて、先々無事に相済たり。

三月二十八日 乙未 火曜 天晴。風。

朝の勤行済。

三月二十九日 丙申 水曜 晴。

朝の勤行済。卒業生より謝恩会。午前十時よりはしまる。昼餐もあり、余興もとりくく珍らしく驚人たるもの也。四時過畢る。食堂に入て茶菓、其上福引はしまる。百六十番迄。夕景、尽く畢。

三月三十日 丁酉 木曜 晴。夜雨。

朝の勤行済で、此日ははじめて本とうの休みに相成。午下より青山万里伯を移転後はじめて伺ひたり。李子も先在て、幸成かな、けふこそ明治神宮え参拝とて、伯も李子も私も参詣する。あたかも御明日にて参拝者も多くて、御神前に参りて只々涙こぼるゝのみ、たゞ有かたさ胸にせまりて。夫より万里家に引返して、ゆるく咄して、夕餐に逢て帰。

*本とう(本堂) *御明日(御命日)

三月三十一日 戊戌 金曜 雨。

朝の勤行済で、西五辻男よりの絹本揮毫する。来客、万里伯来臨。夕飯を上る。自動車にて送り申たり。

(四月)

四月一日 己亥 土曜 晴。64(度)。

朝の勤行済て、たのまれもの、色紙七枚、たにさく二枚、画帖もの揮毫す。来客、万里芳房さま、井上角五郎細君 とその娘、赤倉稻子 その母と、卒業の御礼に来たる。庭の花は咲も残らず散もはしめず。

*たにさく(短冊)

四月二日 庚子 日曜 晴。

朝の勤行済て、来客、姪泰、今日中野を引払、神田新田氏に家内三人とも引移りたると申。午下、津田弘視夫婦と弘人、英と、久々、高橋弘夫婦、建児と、一座三相成て賑々しく、夕景みな帰。結婚の祝もの、斎藤良弼氏え松魚箱、星目竜門、角田月江え金砂縮緬、松魚一箱、升元喜実え金地色紙二哥、色紙かけ、松魚。

*金砂(金紗)

四月三日 辛丑 月曜 晴。夜更而雨。

神武天皇祭。朝の勤行済。午下早々、車をはせて都大路の花、本日こそ満開にて、けふみすはとて、先芝公園に板垣銅像の処より四方見渡す。それより巴町辺の両側の花もよし。東伏見宮様御玄関前の花もよくて、御殿ニ参りて御機嫌を伺ひ、山王の花、三宅坂の花、閑院宮様わたりハ第一也。靖国神社の花より江戸川の花を見て、河鱈子の花にて暫時憩ふて夕景帰。李子等ハ上の平和博の夜景をみて驚歎不止、花満開に電気の色々に爛漫たりと。

*けふ(今日) *上の(上野) *驚歎(驚歎)

四月四日 壬寅 火曜 雨。

朝の勤行済て、揮毫ものス。夜も雨しきり也。

四月五日 癸卯 水曜 晴。 予記 園池公功卜角田月江と結婚披露会、午後六時丸ノ内中央亭。

朝の勤行相済。午前、橋本太吉氏来る。その子も来る。此度、縁談に付此方にてはじめて会見する。宗二郎氏も来りて、種々談話もありて、昼頃みな帰りぬ。午下、津田栄子きたる。

四月六日 甲辰 木曜 晴。 予記 桃園会催し、築地同気倶楽部にて、午後一時より。

朝の勤行済て、一時より、余、李子と同行、築地門跡前同気倶楽部にて桃園会出席ス。開会辞ありて、幹事井上豊子兄弟の琴曲立派也、長唄越後獅子。折詰、サンドリツチ、菓子等、果物にて、種々互にはなしありて四時過退会ス。電車にて帰。朝、佐々木氏え行。夜、大博夜間開場見物ス。桜ハ満開過たれと花さんらんたり。只ア、とさけふのみ。未曾有の極楽浄土也。くたふれて精養軒えよりて自動車を立てて帰。

*花さんらん (花燦爛)

四月七日 乙巳 金曜 雨。

朝の勤行済。午下一時より地明会え出席ス。此会一ヶ月欠席ス。久々にて御構話を聴聞申て帰。

*御構話 (御講話)

四月八日 丙午 土曜 晴、又雨、后晴。 予記 竹柏会催し、如水館にて、午後正一時より。朝の勤行済て、午下一時より李子と同しく自動車にて、雨ふり出して、如水館に集る。春の明ほの兼題哥の披講ありて、余興、二荒伯の講演、仕舞も、独唱其外種々ありて、後、立食。実に盛会なり。五時済て帰。帰途、新田を問て晩飯を呼れて帰。此時、雨晴たり。藤浪様の若奥さまの死去申来る。驚入たり。

四月九日 丁未 日曜 晴。

朝の勤行済。来客、十年余前の卒業生松原いせ、斎藤仁子。夜、太田二郎氏の姉婿なる菊池氏来る。愈早苗縁談決定する。結納万端の約束する。

四月十日 戊申 月曜 晴。

朝の勤行済。入校生始而会合する式あり。種々、入学生、父兄えの申渡しもありて、十二時過

済。

四月十一日 己酉 火曜 雨。夜も雨ふる。予記 升本喜実子、佐々木重夫と結婚披露会、午後五時、上野精養軒。

朝の勤行済て、火曜の稽古する。午後、升本喜実の結婚披露会に行。余興も五番ありて盛大なる披露会也。李子も同行。少し早く帰。

四月十二日 庚戌 水曜 晴。

朝の勤行済て、車をはせて、英皇太子本日朝御来京二付、生徒二、三、四、五年、五十名連て霞ヶ関二行。両側、男生徒、女生徒にて山の如し。十一時御着、奉迎する。わか皇太子御迎ひに成らせられて、みな拝謁す。予も出張す。未曾有の盛形を拝す。学校ハすへて休業ス。

*盛形（盛況）

（四月十三日～十五日、記載ナシ）

四月十六日 甲寅 日曜 晴。予記 観桜会拝観日。

朝の勤行済て、正午より観桜会に被召。此時、河鱒為子同行にて河鱒子え行て、新宿御苑ニ参集する。天気晴朗、風なく長閑なる最上々日にて、御苑の桜花、よしのハちりて、厚もの盛り、また是からと云。新緑も麗しく、さしもの御広き御苑中、とても歩行し尽されぬ。この気色ハ絵に哥にも及はぬ絶気也。やかて皇后宮、摂政宮殿下と英賓客殿下と御同列にて玉歩をはこはせられ、拝謁給はりたり。食堂ひらけ、食事いたゞく。是日の参集人は実に未曾有にて、令嬢たちの奇麗、美術日本のほこりなり。河鱒氏え同行して、甘利氏も来り、夜に入て帰。

*また（未だ） *絶気（絶景）

四月十七日 乙卯 月曜 晴。

朝の勤行済て、授業十二時迄。本日ハ英皇太子殿下夜会、帝劇にて御催ありて、御帰殿頃より雨ふり出して容易ならさる天候、大雷鳴、大雹、鉄砲の如し。雨と風にて実に其音響響るに物なし。私は天を仰いて有かた涙に只々天祐々と有かたかり候。此夜ハ実に何者も悪害いたす事出来かたく、あゝ有かたき哉。

*天候（天候）

四月十八日 丙辰 火曜 晴。

朝の勤行済て、火曜の稽古する。朝起て、庭の雹の積る事驚くへし。予ハ天を仰いて此雹を戴きたり。

四月十九日 丁巳 水曜 晴。

朝の勤行済て、午下二時過より鳥尾子へ行、夜に入て帰。

四月二十日 戊午 木曜 晴。

朝の勤行済て、泰より依頼の扇子六本揮毫ス。朝、佐々木氏を訪て帰。午下二時より若松会内務次官々舎にて催しあり。集る者廿九名の大勢也。坐定て、女の長唄賤はた二秋の色とり。笹折にて食事、畢而庭前にて撮影する。五時帰る。此日朝より寿子、早苗調度もの詰物する。夜、甘利来る。

永井直邦子より、本月十二日男子分娩、直英と命名致候御通知相成候。

*賤はた（賤機）

四月二十一日 己未 金曜 晴。

朝の勤行済て、金曜の授業する。朝十時、菊池氏より荷物人足を遣はされてはこひ出したり。来客、毛利公使者。

*はこひ出したり（運ひ出したり）

四月二十二日 庚申 土曜 晴。 予記 正子百ヶ日。

朝の勤行済て、揮毫ものす。本日ハ英皇太子殿下御退京ニ付、やはり前の通り、李子も朝五時出かけ、生徒五十名御道筋に奉送いたしたり。午下二時より光円寺ニ参詣する。親裁兄弟姉妹も参集。読経、焼香、畢而笹折御すもしもありて、ゆる／＼として帰。来客、河津敏子。

*親裁（親戚）

四月二十三日 辛酉 日曜 晴。 午下小雨、又晴。

朝の勤行済て、揮毫ものス。来客、太田昌子 母と、海軍中佐岩村氏。

四月二十四日 壬戌 月曜 雨。

朝の勤行済て、教授昼迄、畢。終日雨降通して夜二入りても甚し。十一時過、鶴子より電報にて、あす朝八時廿分東京駅着、申来る。

四月二十五日 癸亥 火曜 晴。 予記 早苗、弟二郎と結婚式披露会、午下六時築地精養軒 二而。

朝の勤行済て、火曜の稽古する。やかて、泰、鶴子着。鶴子、午下二時前より日比谷大神宮へ 参集する。来客、万里通よしさま、愈就職、水戸牧場へ出勤(の)よしにて暇乞来られる。午下 五時より自動車にて、余、李子と築地精養軒に行。一同先在。はしめて新郎二逢ふ。森岡より 兄夫婦も出張せられて、極々かんたんに兄弟のみ、太田家も廿七、八人にて互に紹介して、種 々雑談にて食事二付、八時頃めて度相済。早苗ハ実(に)奇麗にて母正子に見せてやりたかつた。 婿なる人も夫婦よく似たるもの也。此新夫婦ハ精養軒二而一泊する。

*森岡(盛岡) *かんたん(簡単) *めて度(目出度)

四月二十六日 甲子 水曜 晴。

朝の勤行済て、本日新夫婦御礼に来ると云。夫より掃除などして待居たり。泰夫婦、津田栄子、 神代鶴子も待受て対面する。茶菓、御合のものなど出して、みな睦ましくくつろきて、咄し面 白く、四時暇乞ス。今夜十時の汽車にて森岡国元へ発足する筈也。鶴子も今夜八時の汽にて帰 神する。

朝十時。今朝十時過、俄然強震ス。生徒一同もみな無事。屋根瓦などはずりて壁など筋入てぬ り替る処多し。

来客、玉塚琴、元荒野新子。

安藤恭子様、黒田茂子様、目黒文平。

*森岡(盛岡) *汽(汽車)

四月二十七日 乙丑 木曜 晴。 予記 午下二時、毛利公園遊会。

朝の勤行済て、佐々木氏へ行て帰。太田孝太郎氏来る。午下二時より、予、李子と自動車にて

毛利公園遊会ニ参集す。御庭の擲つゝし盛也。海面の御茶席にて、奥かた美佐子様かたと御咄しなど申上て、御庭散歩して、其内會堂開られ而、安子様と御会食申上候。御来客ハ七百人余と云。盛会也。美佐子様には来五月二日に築地精養軒にて午餐を上げたきよし仰られて、御約束申上る。

*つゝし(躑躅) *會堂(食堂) *開られ而(開らけ而)

四月二十八日 丙寅 金曜 晴。81(度)。八十度にて、はしめてあつし。

朝の勤行済て、授業十二時迄。来客、岩浪稻子、斎藤仁子、毛利公御使山本央。

四月二十九日 丁卯 土曜 晴。三日月。

朝の勤行済て、早苗よりはしめてはかき着致して大く安心々々いたし候。

廿九日午後三時。来客、菊池第三御夫婦と其男児と御礼に御出にて、太田御父母、早苗にはしめに、御会見、御悦にて御国元にて披露会もありて、すへて都合よく、先々安心く也。

受信 森岡太田弟二郎、早苗よりはかき着。一時に御深切なる父母様を得て此上の幸なき事と存候、万ハ拝眉上にてと。

*はかき(端書) *森岡(盛岡) *はかき(端書)

四月三十日 戊辰 日曜 陰、雨。予記 午下阪本氏行。

朝の勤行済。午下より阪本氏え行。甘利氏先在て、四季の声に没消して夜八時帰。

(五月)

五月一日 己巳 月曜 晴。

朝、清め、勤行済て、九時より十二時過迄教授する。弟二郎、早苗よりはかき(端書)着。松島ホテルにて、四月廿九日。

五月二日 庚午 火曜 陰。予記 毛利公より御招にて築地精養軒え午餐、午前十一時迄に。

午下五時迄に高田津田氏え。

朝の勤行済て、教授火曜行事。前十時半より精養軒え行。毛利美佐子様、醍醐御夫人と成らせられる。三条御勝との、此日御招きの三条資君男、三条の御夫人ハ御所勞にて御欠席にて残念也、外に御家来三人にて午餐を饗せられる。結構なる御洋食にて後二時済て帰。此帰途より小雨。三時半より、予、李子と津田氏え行。新築座敷広やかによく出来たり。客ハ泰夫婦、弘夫婦、津田母方の人と也。庭園頗よく、樹木奇石の配置もよく齊ひたり。鯉昇り見事にたてり。庭散歩す。雨もやみたり。食事、よほどの料理、みな美味、こゝ(凝)りたるもの也。久々日本料理、水入らすの人たちにて。夜九時帰。

受信 弟二郎、早苗より飯坂温泉は書着。

発信 甘利氏えは書出す。

*は書(端書) *は書(端書)

五月三日 辛未 水曜 晴。

朝の勤行済。午下草々、新田氏を問ふ。近処にて買ものする。

*午下草々(午下早々)

五月四日 壬申 木曜 晴。

朝の勤行済て、山岸氏へ行。午前九時より原町なる山岸氏え行。甘利、河鱈夫人も来られて午後四時帰。来客、泰、暇乞に。

午下六時案内。予、李子と五時より華族会館ニ参る。此日和慰会の万里小路通高君就職祝。其外葉室二女、酒井長女、万里すみ子、わした静子。

*わした静子(鷺田静子)

五月五日 癸酉 金曜 雨。 予記 地明会。

朝の勤行済て、原町なる常楽寺え参詣する。泰、今朝九時半ニ出立する。是も送別をさけて誰にも時間をしらせず。李子、停車場迄行。なれと時間間に合すして帰。金曜の授業昼過迄。一時より常楽寺え参詣して、本多師の御講話を済て、種々時局御咄しありて帰。帰途、河鱈氏を問て帰。

五月六日 甲戌 土曜 晴。

朝の勤行済。日下部米子より、西洋活動、帝劇にて催される二付、余、李子、招かれる。わしたと朝倉氏と有楽座に行。国活提携フロクム妖婦イムペリア、よほどよく出来たり。十一時済て帰。自動車にて帰。

*わした(鷺田)

五月七日 乙亥 日曜 陰、雨。

朝の勤行済て、午下早々、高輪毛利安子様ニ御目ニかゝりて久々御咄し申上て、御本殿美佐子様ニ御目ニかゝりて種々御閑談申上候。四時去る。それより鉄道協会に宮城氏の温習会二行。皆々よく出来たり、感心。山岸氏、種々御世話下され候て、五時過帰。来客、稲田君子。

五月八日 丙子 月曜 晴。 予記 浅草婦人会。

朝の勤行済て、教授十二時過迄。午下早々、浅草婦人会に行。四時帰。来客、高橋照子。

五月九日 丁丑 火曜 晴。

朝の勤行済て、火曜の稽古する。来客、藤岡喜美子。御所より御使にて、花松鍾子さま、両典侍さま御文にて、皇后陛下思召さまにて九州行啓の御土産として御下賜相成たる御品々、博多織テーブル掛、綾杉袋、高砂染御ふくさ、博多人形 男児の釣する処、浜納豆一箱、千歳卵素麵二箱、御名酒三瓶、黒たん金蒔絵、羊毛大筆、御成先絵はかきいく組も、外に御写真、右十種陛下の御思召さまよりこの数々御下賜相成候て、何たる有かたき御事かな。只々感泣の外無之候。この昼過、地大に震す。夜、橋本宗二郎。

受信 正親町典侍様より御文と、姉小路良子さまより菜の花つけ。

*黒たん(黒檀) *はかき(端書)

五月十日 戊寅 水曜 晴。 予記 森律子より招待。

朝の勤行済。九日、英皇儲、愈鹿兒島を御出発相成たる由、今朝の新聞にて伺て、是ほとの有かたさ、四月十二日御着京より今日迄、御滞在中何事もおはさぬ様にも祈願をこめたるを、其御加護いちらしく御無事にて大く安心々々。フランス オヴ ウェールズ殿下より日本国民に御挨拶の御文、左之通(以下、記述ナシ)。

午下早々、河鱸子に行。夫より帝劇見物ス。十一時過帰。

五月十一日 己卯 木曜 晴。

朝の勤行済て、さゝ(佐々)木氏を問ふて帰。来客、鳥尾泰子さま御出にて、暫時にして帰られたり。夕景より甘利氏、神氏を連れて来る。四季の声、尺八と合奏する。九時過帰。

*さゝ木(佐々木)

五月十二日 庚辰 金曜 雨。 予記 伝馬町宗信楽院廿三年忌。

早起。千葉え遠足之筈、雨ふり出して中止する。

五月十三日 辛巳 土曜 予記 代々木久米氏行、午下二時より。

五月十四日 壬午 日曜 晴。 予記 甘利氏温習会。

朝の勤行済て、午下一時より、予、李子同しく午込南蔵院へ行。甘利氏孫娘の追善会にて皆々の演習を聴く。予ハ八千代獅々一弦琴、最終四季の声 三弦五人、竹 神氏にてまつく演し終りて安心々々。九時比帰。

*まつく(先々)

五月十五日 癸未 月曜 晴。

朝の勤行済。生徒遠足会、六時出門。朝、神田迄買物二行。新田え立よる。午下一時過より宮中参内する。突然ながら北の御車寄より参る。花松典侍、鐘子典侍様御対面。やかて皇后陛下下拝謁仰付られ、種々御咄しとも伺ひて、武庫離宮御苑の松かさ大なるを御手つから私え御下賜相成、有かたく候。感泣の外無之候。これから御養蚕所え成らせられるゝ(衍)二付、御供奉せよとの仰事にて御供申上る。御養蚕所ハすへて蚕事に適したる御建物にて、蚕は今二眠くらゐて種より追々そたちてあるを、一枚ツゝ大数枚を御熱心に見そなはす。日々の御覧にて、おのれは養蚕の事ハはしめてにて、種より眉造る迄、生糸になる迄の御説明も遊はし戴きて、蚕事の学問出来たり。此間三時間位、桑を御遣しになる。惣体可残拝見致して、実に有かたき事也。四時過宮中に返りて、御合のものも結構に頂戴いたし、陛下より種々のもの拝領いたし、此日ハ加茂祭ニ付御赤飯、しらむしも戴く。けふは何と申たる事には、御側近く御はなし共に

て、只々有かた涙のみ也。

* 鍾子典侍様 (鍾子典侍様) * 大数枚 (多数枚) * 眉 (繭) * 惣体可残 (惣体

不残) * 返りて (帰りて) * けふ (今日) * 申たる事には (申たる事にや)

五月十六日 甲申 火曜 陰、小雨。

朝の勤行済。来客、橋本太吉氏。火曜の稽古する。御所花松、正親町両典侍さまえ御礼の文さし上る。

五月十七日 乙酉 水曜 晴。

朝の勤行済。小石川少年団に寄附頼みに来る、田島憲蔵、金五円出ス。

五月十八日 丙戌 木曜 晴。 予記 原町酒井伯にて東洋婦人会、支那北京女子師範卒業生を招く事、午下一時より。

朝の勤行済て、佐々木氏を問ふ。午下一時半より原町酒井伯邸に行。本日東洋婦人会より支那師範卒業生廿二人を招く。附属人三十人計も来る。東洋婦人会員八十人計集る。演舌もありて、三弦、舞踊の余興もありて、後、庭園に下りて一同写真撮影して、茶菓等にて五時畢而皆帰。

五月十九日 丁亥 金曜 晴。

朝の勤行済て、早昼済して、予、鷺田、万里、今宮と自動車にて上の精養軒に行。会員多勢集る。やかて三時より余興始る。独唱三番、ヒヤノ等。本日集る会員三百三十人也。安堂、黒田、恭宮、茂宮様も成らせられる。白鶴講演、杵屋連長唄、下かた等にて、藤間 (空白) 娘と二人賤はた帯、面白く出来たり。五時より食堂開く。李の挨拶、万伯の来賓総代の御挨拶ありて無事閉会告げたり。此時、少雨ありて、余、万伯、酒井きみ様、すみさま、寿子と自動車にて帰。

* 上の (上野) * 安堂 (安藤) * 白鶴 (伯鶴) * 賤はた帯 (賤機帯)

五月二十日 戊子 土曜 朝雨、后晴。 予記 堀田伯正風会、欠席す。

朝の勤行済。十一時頃、約の如く支那女学生廿二人、学校参観。時間のひまなくて、体繰のみ漸くみて、茶菓を出す。李子の演舌ありて、支那人の通弁等ありて、大いに悦ひ、十二時過帰。

文部省普通学務局富樫吉郎、日華学会山口定太郎、外ニ支那人三人也。来客、津田栄子。

*体操(体操)

五月二十一日 己丑 日曜 陰。 予記 小石川善光寺、春季大会、午前十時より。

朝の勤行済て、午下一時より善光寺大会に参る。説教、及余興等ありて、四時帰。

五月二十二日 庚寅 月曜 朝雨。

朝の勤行済て、出勤、正午過迄。

五月二十三日 辛卯 火曜 朝雨。

朝より本雨しとふる。朝の勤行済て、火曜の稽古する。後、揮毫ものス。夕景、李子(と)近方散歩する。

五月二十四日 壬辰 水曜 晴。

朝の勤行済。大坂寺田よりそら豆着。直ニはかき出す。午下、河はた子え行。

御寺の御所より蚕豆、山椒着。返書出す。

*はかき(端書) *河はた子(河鱒子)

五月二十五日 癸巳 木曜 晴。

朝の勤行済て、佐々木氏え行。来客、藪篤子様、甘利氏。

五月二十六日 甲午 金曜 晴。

朝の勤行済。九時より十二時過迄教授する。

五月二十七日 乙未 土曜 晴。 予記 午下一時より久米民之助家の送別園遊会、出席。

朝の勤行済て、揮毫ものす。午下一時より、予、李子と自動車て代々木久米氏え行。余興最中、喜劇 曾我の座二坐、奴道成寺 沢村宗之輔一座、長唄杵や連、下方等、舞台も立派、食堂広大、模擬店もあり。何しろ二万六千坪なる、建坪も千坪と云、此度、徳頼倫侯に譲り渡したる送別会也。然し惜みても猶余りありなるか。然し此広大なるを買手も有て、実に結構なる事也。五時畢而帰。

来客、斎藤仁子。

〔*曾我の座（酒家） *沢村宗之輔（沢村宗之助）〕

五月二十八日 丙申 日曜 晴。 予記 築地同気倶楽部にて頼山陽会、出席。

朝の勤行済て、午下早々、築地同気倶楽部に行。山陽先生遺物展覧の出陳、一々拝見す。会主幹、三枝光太郎氏に逢ふ。春水、春風、杏坪、三樹、小竹、星巖之部もあり。よく集りたるもの也。三時帰。はしめて単物着る。

山口県藤村氏より松茸着。

五月二十九日 丁酉 月曜 晴。 予記 午下一時より田島氏にて仏教会。

朝の勤行済て、九時より教授する、十二時過迄。午下二時より田島氏に行、説教三座聴聞する。土井氏より新茶一箱。

発信 藤村氏え松たけ着返書出ス。

五月三十日 戊戌 火曜 晴。

朝の勤行済て、火曜稽古する。来客、岩村その子、妹光、静と。

発信 土井氏、茶の礼状出ス。

五月三十一日 己亥 水曜 陰（ママ）。

朝の勤行済。朝より雨ふり出して、夜もなほふり通して、よき雨なりけり。

（六月）

六月一日 庚子 木曜 晴。

一日の神前祓をして勤行す。佐々木氏え行て帰。昼飯後一時より、余、李子と雨宮をつれて自動車にて平和博にはしめて見物する。第一開場より見つゝ、文化村にて一軒ツ、階上階下共にみる。成る程小さく斉ひてよく建たり。茶亭にやすみて、後、美術館に入て日本画、洋画等もみる。皆思想をこらしたり。五時過て精養軒に休みて自動車にて帰。夜、甘利氏来る。

*第一開場(第一会場)

六月二日 辛丑 金曜 晴。

朝の勤行済て、九時より教授昼過迄。

六月三日 壬寅 土曜 晴。

朝の勤行済。来客、義士会児島宗徳氏、義士大観を是非一部買てくれと頼まれて買ふ。一部三拾五円也。妹尾義郎来りて書を懇願す。承諾しかたしとて断て、外に全紙に高閣巍然望杳然之七絶を遣す。佐々木信綱君より草花種々に哥をそへて、

この花をさゝけてまつるうつくしき君か言葉の露よかゝれと
右の返事出す。

六月四日 癸卯 日曜 晴。

朝の勤行済て、九時より十二時迄教授する、学校の都合にて。十二時より車にて新橋にて集る。和慰会。万伯、堀田伯幹事にて先在。みな待合せて、午下一時半より電車にて鶴見花月園二行。此一行十九人也。天気ハ申分なし。別挑にて心地よし。鶴見停車場より徒歩する。花月園の一番高層するみとり亭にて、此座敷眺望には至極妙々、みな下のあらゆる処に行て遊ぶ。一日楽天にて山海気色、わか物として見尽す。夕飯も至極美味にて驚々入たり。ゆるく食事済て九時迄遊ぶ。帰り仕度にて一同帰。半日の楽しみ極めたり。月もよし、九日月也。

*別挑(別謎) *高層する(高層なる) *わか物(我物)

六月五日 甲辰 月曜 晴。

休日。朝の勤行済て、午下一時頃より、予、寿子と共に電車にて中野太田氏を始て問ふ。早苗ひつくりにて予等を迎ふ。此新築の家も中々によろし。二階八畳に六畳、是ハ主人書齋にて風すきよし。四方に窓ありて設ケイもよく建たり。下も八畳に六畳、玄関二畳、四畳位なる洋館めきたる客間ありて、台所、湯殿、女中部や三畳もありて都合よくて、床幅物、装飾物もとゝのひて不自由もなき様にみえたり。庭もあり門の庭もありて、近所も新らしき家にて文化村らしき也。眺もよくて至極結構なり。五時に弟二郎帰宅にて種々咄して帰。六時半比帰。

*二階(二階) *設ケイ(設計) *女中部や(女中部屋)

六月六日 乙巳 火曜 晴。

朝の勤行済て、火曜の稽古する。

六月七日 丙午 水曜 晴、雨。

朝の勤行済。午下三時より阪本氏に行。夕景帰。此時より雨ふり出したり。

六月八日 丁未 木曜 雨。

朝の勤行済。来客、津田栄子と共に佐々木氏ニ行而帰、寿子も来る。夜九時ニ皆帰。甘利氏来る。

六月九日 戊申 金曜 晴。

朝の勤行済。金曜教授する。午下より地明会ニ行、五時帰。

六月十日 己酉 土曜 雨。

朝の勤行済。十時、時といふ講演、今井兼寛氏。竹内氏夫婦、五島善子。

竹内夫婦始而來る、一。

六月十一日 庚戌 日曜 晴。

朝の勤行済。午下、河はた子え行、夕景帰。来客、太田夫婦。

*河はた子(河鱒子)

六月十二日 辛亥 月曜 入梅。晴。

朝の勤行済。月曜教授する。入梅ながら天晴朗。新内閣成る。

総理大臣兼海軍大臣 加藤友三郎男

鉄道大臣 大木遠吉

内務大臣 水野錬太郎

司法大臣 岡野敬次郎

大蔵大臣 市来乙彦

文部大臣 鎌田栄吉

農商務大臣 荒井賢太郎

逋信大臣 前田利定

竹内夫婦来ル、二。

六月十三日 壬子 火曜 晴。

朝の勤行済。火曜の稽古する。来客、長尾雄。

六月十四日 癸丑 水曜 晴。

朝の勤行済。午下三時より河鱒子え行。

竹内氏来る、三。

六月十五日 甲寅 木曜 雨。

静かなるさみたれ雨の日。朝の勤行済で、さゝ木氏を問ふ。午下より雨になる。夜、甘利子来る。

*さゝ木氏(佐々木氏)

六月十六日 乙卯 金曜 晴。85(度)。

雨、又晴。朝の勤行済。金曜教授する。午下四時より、予、李子と帝劇に行。男優義士伝にて面白く、十時四十分畢。

六月十七日 丙辰 土曜 雨。

朝の勤行済。

竹内夫婦来る、四。

六月十八日 丁巳 日曜 晴。

朝の勤行済。午下早々、堀田伯二行、五時帰。それより阪本氏え行、八時帰。竹内夫婦来る、五。

六月十九日 戊午 月曜 晴。

朝の勤行済。教授する、昼迄。揮毫ものする。

六月二十日 己未 火曜 晴朗。

朝の勤行済て、火曜の稽古する。

山形県長崎町岡村尚子より桜もゝ一箱。

竹内来る、六。

六月二十一日 庚申 水曜 晴。

朝の勤行すむ。

六月二十二日 辛酉 木曜 晴。

朝の勤行も済て、佐々木氏へ行。やかて津田栄子も来りて共に帰。寿子も来る。此日より寿子、甘利氏に入門す。土井田鶴子来りて、わか稽古を見て一弦琴の入門する。

受信 神戸佐々木静子より。

*わか稽古(我稽古)

六月二十三日 壬戌 金曜 晴。

朝の勤行すむ。幾子、少々腹いたみ出したるに、産婆電話にて呼に遣したるに、直に来る。予ハ教授のある日にて九時に見舞ふ。まだ落付居たり。十二時迄、教授ニかゝると云て教場へ出る。十時半もはや出産ありたると李子より。直にうふやに行て見るに、玉の様な男子にて、実にたくまじき貌付、よく發育も出来て、悦ひ究りなし。十時廿分、**娒婉**と云。

竹内夫婦来る、七。

*うふや(産屋) *究りなし(極りなし) *娒婉(分婉)

六月二十四日 癸亥 土曜 晴。

朝の勤行済て、寿子、栄子来る、約の如し。予、李と四人連、自動車を雇ふて上野平博二行。今日を期して外に暑気に迎ひてはと云ふので、第二会場、支那、朝鮮、外国館、北海道から尽

く見物する。精養軒にて昼餐をする。それよりまた残りをみな見る。畢而演芸館に露人の歌劇をみる。畢而迎賓館にて暫時休憩して、精養軒にて納涼して自動車にて帰。種々買ものする。榮、寿と共に夕食して、八時過みな帰。

六月二十五日 甲子 日曜 地久節。晴。

朝の勤行済て、八時より職員生徒講堂に集会ス。校長君か代拝読、校長の皇后陛下の御上を演舌ス。畢而主事演舌もありて、皇后陛下の唱歌にてめて度相済。本日ハ淳宮殿下御成年御式御挙行成る。寄宿舎にて地久節会食余（ママ）もある。后六時頃より雨ふり出し夜もふる。雨喜。

竹内夫婦来る、八。

*めて度（目出度）

六月二十六日 乙丑 月曜 晴。

朝の勤行済て、九時より十二時迄教授ス。今朝の新聞に東伏見宮殿下御重態に驚き入たり。下村千賀より、ボルネヲ産マンゴー三箇。

六月二十七日 丙寅 火曜 陰。 予記 午下三時より五時迄、華族会館、仙石政敬披露会、宮様薨去ニ付延引。

朝の勤行済て、今朝の新聞にては東伏見宮薨去、昨夜十一時廿五分と承る。早速、朝七時半東伏見宮え参りて御弔詞申上る。奥なる老女るい女に逢て種々承る。火曜稽古日。

六月二十八日 丁卯 水曜 晴、雨。

朝の勤行済。東伏見宮御薨去ニ付、河はた子行やめる。午下より東伏見え参り御棺前に参拝ス。良君様にも拝謁して弔詞申上る。夫より閑院宮様え参り、御息所に拝謁して御閑話申上候。夕餐を戴て帰。

憲重一男命名式

純弘 予撰

純弘児、里子に預ケる。乳母来りて乳の検査も至極よくて愈此人に預ける事に究る。

*河はた子（河鱸子） *究る（極る）

六月二十九日 戊辰 木曜 晴、雨。

朝の勤行済で、佐々木氏を訪ふ。白岩竜平氏に逢て支那状況をきく。已而帰。来客、津田栄子、純弘七夜の祝日也。

六月三十日 己巳 金曜 晴、又雨。

朝の勤行済で、授業十二時迄。

(七月)

七月一日 庚午 土曜 晴。

朝の勤行済。来客、新田きく。泰、古倫母より端書着。出発以来海上静に香港、新カッポール、馬校加も無事、印度洋モンズウンにて四日間大波に出会、客の大部、食堂も欠席、小生ハ無事今日古倫母に着スト。始而無事の報を聞て安心々々。此日、予、李子、跡見寿子、静子、広はし寿子と上野精養軒に納涼ホームに行。余興も沢山あり。然し此精養軒の納涼的庭の模様、博覧会の一体の景色実に奇麗爛漫たるもの也。食事済で、九時自動車にて帰。

*古倫母 (コロンボ) *新カッポール (シンガポール) *馬校加 (馬拉加) *広はし寿子 (広橋寿子)

七月二日 辛未 日曜 晴。予記 賀茂氏一週忌二付、華族会館、六時。

朝の勤行済。午下四時より東伏見宮御棺前参拝す。御奥にて六時迄。それより華族会館二行、賀茂正房一週忌二付御一同皆参集。やかて七時より会食。八時過帰。風甚。

*一週忌 (一周忌) *一週忌 (一周忌)

七月三日 壬申 月曜 陰、晴。予記 東伏見宮御葬儀、午前七時。

朝六時半より、余、李子と同しく愛国婦人会迄、御葬儀奉送申上る。朝小雨、昨日よりの風も此小雨にて止み、御葬儀七時御出門比より雨もやみて静かなる空にて奉送する。天気都合よく午下より又雨降り出したり。此夜、竹内夫婦来り、伝教大師御絵伝拝見す。三昧仏一幅拝受す。

竹内氏、一。

*三昧仏 (三昧仏)

七月四日 癸酉 火曜 雨。

朝の勤行済。火曜の稽古する。

七月五日 甲戌 水曜 晴。 予記 地明会行。

朝の勤行済て、水曜稽古休む。午下一時より地明会二行、御講話を聴聞申て帰。

竹内氏、二。

七月六日 乙亥 木曜 晴。

朝の勤行済て、午下一時に竹内夫婦、笹本和尚を御請したる。始而御対顔を得る。此時、予、李子、井上、津田栄子、斎藤仁子、静子、すみ子。宗教の義をのへられて、はしめて宇宙の大霊を大観する事を得られ、とうくと伸へられ、漸々に益々明らかに相成。実に夢の如く、また幻の如く、明の如く、何とも筆には尽されぬ。時、七時、夕飯を出す。実に有かたしとも有かたし。

東神奈川行、約束ながら、右の笹本和尚より此方え御出の事になる。

*とうくと (滔々)

七月七日 丙子 金曜 七月七夕。晴。

朝の勤行済て、学校教授、正午まで。此日有約て、佐々木先生御夫婦自動車て午下一時半より藤田さま御迎に見えて、此自動車にて同行。西本願寺にて九条武子様御催しの会にて渡辺伯未亡人、鎌倉より真島夫人、すへて七名也。始源氏葵の巻講義、済、七夕に關したる書類御もち出しにて、二星の来暦御咄しありて、七夕の題にてくじ、五色のより糸にて二人つゝ結ひ付て、上の句下の句二人にて当座、団扇に此哥をかく。次、秋の七草、是もくじ引にて萩を得たり。夕食後、直に帰。今夕、月尤清し。

萩

こゝろして子らよ行かなむ真萩原露もにほへる秋のさかりを

此夜より勤行千遍、夜一時。

竹内夫婦、三、齋藤仁子来る。

*来暦 (来歴)

七月八日 丁丑 土曜 晴、雨。

朝の勤行済。中元之贈りものにていそかし。
夜の勤行すむ。

七月九日 戊寅 日曜 晴、雨。

朝の勤行済て、わし (鷺) 田静子、跡見いく子、下女はつ、所労に付、竹内氏をたのみにて療事する。森律子より招待により、余、李子、午下五時より帝劇見物する。新季一変すへて新らしく大ゐに感したり。十時半済て帰。月清し。

夜の勤行千度、一時。

竹内氏、四。

*わし田静子 (鷺田静子) *療事 (療治) *新季 (新規)

七月十日 己卯 月曜 晴雨不定。

朝の勤行済て、学校出勤、十二時迄。余、此日を以て夏期の修業ス。
夜の勤行千度、一時。

*修業 (終業)

七月十一日 庚辰 火曜 晴。

朝の勤行済て、火曜の稽古する。

七月十二日 辛巳 水曜 晴。

朝の勤行済。午下三時より川はた子え行。

*川はた子 (河鱒子)

七月十三日 壬午 木曜 晴。

朝の勤行済て、佐々木氏を問て帰。来客、岩浪稲子、甘利氏、竹内細君 其嬢と、寿子も。夜勤

行千度済。

七月十四日 癸未 金曜 晴。

朝の勤行済て、本日より学校試験はしまる。

夜の勤行三千度。

七月十五日 甲申 土曜 晴。 83 (度)。

朝の勤行済て、揮毫ものス。

夜の千度勤行済。

七月十六日 乙酉 日曜 晴。 85 (度)。

朝の勤行済。

夜の勤行三千度。

七月十七日 丙戌 月曜

夜の勤行三千度。

七月十八日 丁亥 火曜 晴。 大雨二時間位にて全晴。雨量勿にして川となる。

朝の勤行済て、火曜稽古仕舞する。午下一時より堀田伯二行。午後三時比より大雨ふり出した。五時過、雨全晴て帰。来客、京中島鶴巻、李子面会中、大音響にて裏の土手くつれ出し、土手手入中、建仁寺垣を外えのけてくれと云故、前日のけて地もゆるみたるに、大雨にて土手くつれ出し、庭石、経界の檜の木五、六本共に川に落て大さわき、垣ねも不残川に落て、明はなしに相成たり。柳町出水川の如し。

夜の勤行三千。

竹内夫婦来る、五度。

*勿にして(忽にして) *経界(境界)

七月十九日 戊子 水曜 晴。

朝の勤行済。午下有約、五時より、予、李子、中島鶴巻、内田恒子を誘引して、岡本よし子よ

り自動車にて迎ひ来り、築地天小町に行、晚餐をする、李子より招待のはつ。ゆるく昔物語りに時を移して、夫より上野夜開場に行。予ハ是より帰宅する。
夜勤行三千度。

*はつ(筈) *夜開場(夜会場)

七月二十日 己丑 木曜 土用入。天気晴朗。晴。

朝の勤行済て、九時比より新田氏を訪て、夫より東伏(見)宮御喪中を伺ひ参拝ス。良君様にも拝謁ス。此時久爾宮御息所様、方子女王、其外御妹女王御二方とも御参りにて、計らすも拝謁仰付られたり。暫時にして退出ス。此夜、甘利来る。来客、津田栄子、上野石子、寿子も。夜勤行三千度。

*久爾宮(久邇宮)

七月二十一日 庚寅 金曜 土用二郎。晴。85(度)。

朝の勤行済。秋萩の図、箱書付。墨竹図、箱書付。来客、松平鞆子さま。水戸後藤氏面会。今朝八時一分にて帰。中島鶴巻、今朝帰京、電話にて。夜の勤行三千。

*朝八時一分(朝八時一分)

七月二十二日 辛卯 土曜 土用三郎。晴。85(度)。

朝の勤行済。所々え暑中端書出ス。来客、久米氏。光重、下婢はつか連れて始めて津田氏へ行。時間おくれたる二付、一同御心配、漸無事津田へ行たる事分りて、大く安心々々。夜の勤行三千。

竹内夫婦、六度。

七月二十三日 壬辰 日曜 土用四郎も結構々々。晴。89(度)。

朝の勤行済。純弘、田舎より帰、よほと顔も色黒く強く発育もよろしくて。御宮詣り日川神社え参拝ス。松島氏より電報にて、女子安産母子ケンゼン、午の五分。夜の勤行三千。

*日川神社(氷川神社)

七月二十四日 癸巳 月曜 五郎。晴。

朝の勤行済て。

夜の勤行三千。

七月二十五日 甲午 火曜 土用六郎。晴。

朝の勤行済て。摂政宮殿下は北海道御視察もするくと終へさせられて、何の御障りさまもあせられスとの御模様にて、本日御帰京の由にて、われの悦ひ限りなし。此暑さにも御障りもあらせられず。長々の御旅行も済せられて有かたく、仏神に願望成就す。有かたしも有かたし。来客、土屋秀禾氏。竹内細君同行にて、伝教大師御絵伝の筆者にて有かたき人也。李子ハ職員一同をつれて箱根に行。春よりの慰労会を底倉蔦屋にて催したり。
夜の勤行三千。

七月二十六日 乙未 水曜 晴。此日はしめて瑞雨ふり出したり。

朝の勤行済て、八時前に笹本上人東神奈川より御来臨にて、仏教の御講話を伺ひて、実に宗旨の皮髓を解かれたり。来客、竹内氏、田中文学士、其外も。十二時迄四時間のたて通し。昼餐を饗ス。已而御帰。雷神なる。此時より潤雨ふり出し、実に金の如し。喜雨。
夜の勤行三千。

七月二十七日 丙申 木曜 晴。

朝五時三十分起て勤行一時間。佐々木氏へ行。神田宮内氏にて筆を買て帰。此日より朝の勤行はしむ。

竹内氏。

七月二十八日 丁酉 金曜

朝四時半起て勤行一時間半。東宮殿下、京都桃山先帝の御十年祭に御執行に御出發あらせられる。来客、山梨県地場伝一郎。

七月二十九日 戊戌 土曜 晴。

朝一時半起。勤行三千。来客、内海信子。
竹内夫婦、八。

七月三十日 己亥 日曜 晴。90 (度)。
朝二時起。勤行三千。

七月三十一日 庚子 月曜 晴。
朝三時起。勤行五千遍、五日目。来客、斎藤仁子。

(八月)

八月一日 辛丑 火曜 晴。88 (度)。

朝三時起。勤行。朝八時、笹本上人御来臨。竹内夫婦、田中氏、斎藤仁子、津田栄子、其外。
御講話三度目にて、漸々と真理の中の真理大悟徹底せにやならむ処迄御解あかしに相成、十二時迄。昼餐を上げて御帰相成たり。田中氏より弁栄上人三昧如来大幅持参にて、床にかけて拝礼する。

*ならむ (ならぬ)

八月二日 壬寅 水曜 晴。88 (度)。

朝三時起。勤行す。今朝七時廿分にて軽井沢へ出発ス、李子 唐橋、岡村両人 銀を供に。

八月三日 癸卯 木曜 晴。85 (度)。

朝三時起。勤行五千。来客、大江氏。箱根北野元峰氏返書。鎌倉大川南側本興寺から佐々木信綱君より書至。午下四時頃、雨ふり出して暫時にして止。甘利氏来る。

*鎌倉大川 (鎌倉大町)

八月四日 甲辰 金曜 晴。9 (90) (度)。

朝四時起。勤行三千。三条西浜子霊え御香料五円。

竹内夫婦。

受信 軽井沢李子より書至。

八月五日 乙巳 土曜 晴。89 (度)。

二時起。勤行す。甘利氏来る。来客、岩田氏。余、朝八時より代々木志賀鉄千代さまの病氣を
あんじて訪ふ。御病人もけふはよほと気分もよくて、蓐の上にて種々はなしなとして、其内篤
義君の細君も御出にて、久々にてかたり合ふ。御病人も追快方にて、先々よき氣先にて大に
安心々々。暫時にして帰。昼十二時迄。此あつさ限りなし。

八月六日 丙午 日曜 晴。90 (度)。 予記 午前七時より八時迄、本郷麟祥院にて三条西
浜子。

朝四時起。勤行ス。すみ子、此朝七時廿分の汽車にて軽井沢行。予、七時より麟祥院にて三条
西浜子さまの告別式焼香して帰。此日の暑さ、心静に書見して居て汗の流るゝ事水玉をなす。
当年の土用の照りは三十年来の土用にて、米、其外すへて豊作々々、有かたき事也。夜十一時、
李子軽井沢より突然帰。予、暑さに堪かねて臥。夢に極楽体想を見る。諸仏の立並ひたる、実
に奇麗にて、李子の帰りたるに眼さめたり。
はしめて見仏し奉る。

*体想 (体相)

八月七日 丁未 月曜 晴。93 (度)。

朝三時起。勤行する。朝より九十二度にて土用中第一也。来客、酒井喜美様御出にて、李子同
車にて堀田伯え行。夜九十四度位にて眠に付事能はず、一時より入座三昧三時迄して臥。風な
く月は十五夜にて、真如の影、明々光々たり。此夜の夢に釈迦の御涅槃を拝む。其側に、極々
薄き絹に細蜜なる模様にて、とても人間業にては及はぬ奇麗なるを、加様なものも織れますと
云て、仏より見せて戴きたり。其うしろには数多の仏ましましたり。
第二の見仏し奉る。

*細蜜 (細密) *加様 (斯様)

八月八日 戊申 火曜 立秋。晴。90 (度)。

朝の勤行。昨夜より引つゞきにて三昧座に入る。来客、斎藤菊寿、大束氏、鎌倉橋本太吉、京都より竹田宇の女、昼飯を供にして二時頃帰。夜ハ雨宮、甘利、寿子も。

八月九日 己酉 水曜 晴。94 (度)。

朝四時起。三昧座に入る。京都姉小路良子様、高倉様、御寺御所、時候見舞、小包もの出ス。裏の土手直しに付、井深氏及小林に相談する。

八月十日 庚戌 木曜 晴。92 (度)。

朝四時起。三昧座に入る。五時李子出發、六時の汽車にて箱(根)強羅行。途中より雨宮同行。長谷川千賀子嬢三人とも同行也。此日も同暑気ながら風有て少し凌きよし。夜庭に出て、十八日の月清く、はしめて虫の声をきく。

人はいさあつし／＼とこほろきの秋しる声に驚かれぬる

鼈味噌、鯛味噌、大坂唯専寺より着。

八月十一日 辛亥 金曜 晴。90 (度)。

朝一時半より起て三昧に入る。はしめて六千遍。此静かなる此時も風なくて九十度のあつさも。李子、箱根強羅久米氏より、下部金、持帰る端書、先結構此上なしといふ。

一雨といはん日はなし蟬の声

此夜の夢に、阿弥陀如来大尊像の廻りに、菊の葉を長くしたる様、草緑の色彩の工合を教へてやるとて、先菩提樹の葉かと思はれるを揮毫しつゝあるをゆめ見る。

第三回見仏し奉る。

竹内夫婦来る。

発信 鎌くらさゝ木氏、大坂跡見え、宮城正親町様え。

*鎌くら (鎌倉) *さゝ木氏 (佐々木氏)

八月十二日 壬子 土曜 晴。90 (度)。

朝四時起て三昧座に入る。此日、八畳三間、押入、みな大掃除する。

八月十三日 癸丑 日曜 晴。90 (度)。

朝五時起。三味座に入る。外出、湯島の数珠やに行、茅町の眼鏡やに行、牛込河鱒子ニ御病氣を見舞、暫時にして帰。高橋弘夫婦と建チヤン来る。此朝、竹女強羅え行。此日、奥新座敷大掃除する、静子ともとの二人して。高橋弘夫婦、建チヤンを連れて来る。

*数珠や(数珠屋) *眼鏡や(眼鏡屋) *建チヤシ(建チヤン)

八月十四日 甲寅 月曜 晴。

朝三時前起て、三味座に入る。此朝、鳶頭小林、植木や神倉と来りて、裏の土手直し相談して、愈明十五日より取かゝる事に相究りたり。

*植木や(植木屋) *相究りたり(相極りたり)

八月十五日 乙卯 火曜 晴。85(度)。

朝五時起。三味座に入る。朝より雨ふり出し、又晴、又ふり度々也。然れ共暑さは八十五度位。李子、朝十時着。函根より帰、竹を連て。

○第四回、此夜の夢に、渡り四寸位の花、実に奇麗なる時計草の様なる花を見せて戴きたり。

竹内夫婦来る。

八月十六日 丙辰 水曜 晴。90(度)。

朝四時起して、載三味座ニ入る。此朝、朝くら、軽井沢に出立する。来客、荒井吉次郎氏。李子、井上、此夜十一時汽車にて唐沢山え出立する。

受信 京都高倉様より素麺、帛紗、小包着。

*朝くら(鎌倉)

八月十七日 丁巳 木曜 晴。90(度)。

朝四時半起。三味座に入る。此夜、甘利氏きたる。上諏訪温泉宿鷺の湯に安着之由申来る、十七日出端書也。

発信 京都高倉様え返書ス。

八月十八日 戊午 金曜 晴。

朝四時半起。三味座に入る。此日より李子、八重子、唐沢山にて三味に入る、初日也。

八月十九日 己未 土曜 晴。96 (度)。

朝四時起。三味座に入る。李子、八重子より十八日出の端書着、信州唐沢山法国山阿弥陀寺に而。甘利氏来る。雨宮も。斎藤仁子も。

八月二十日 庚申 日曜 晴。92 (度)。風有て凌きよし。

朝四時半起。三味座に入る。此朝、微恙、少し下痢気味で惣身だるく、浜野を呼て療治させる。又井深氏を来てもらひ疹療。時気の当りにて発熱もあり薬用す。はしめての発熱にて熱の苦しき事覚えたり。終日臥。此朝、三井得右衛門氏告別式にて、参拝もと思ひたれと、身のくるしさに止めたのである。

*疹療(診療) *時気(時季)

八月二十一日 辛酉 月曜 晴。92 (度)。

朝の三味座ニ入て勤行出来たり。熱もさめて気持よし。

八月二十二日 壬戌 火曜 晴。92 (度)。

朝の三味座に入て勤行ス。朝七時頃、李、八重子、唐沢山より無事帰着ス、夜行にて。みな驚々入たり。願行成就して帰。種々有かたきはなし沢山ありて結構々々。此時より雨少しふり出したり。

八月二十三日 癸亥 水曜 雨。95 (度)。

朝の三味座に入て勤行。竹内夫婦来る。唐沢山のはなしにて種々結構々々。此日、岡村、子供と軽井沢より帰着。

(八月二十四日、二十五日、記載ナシ)

八月二十六日 丙寅 土曜 晴。85 (度)。

竹内氏。

八月二十七日 丁卯 日曜 晴。80（度）。

朝四時起。例の如し。閑院宮様より御たのみの御扇子二本、秋の七草の図、秋の山水、揮毫ス。

八月二十八日 戊辰 月曜 晴。80（度）。

朝四時起。三昧座に入る、例の如し。来客、尾田、内海乙女、大関、岩浪稻子。閑院宮様御命令の扇子二本さし上る。夕方より李子、志賀氏え見舞に行。揮毫ものス。

竹内氏。

八月二十九日 己巳 火曜 晴。

朝四時起。三昧座に入る。六時迄。清涼。

発信 太田早苗え返事出ス。

八月三十日 庚午 水曜 晴。85（度）。

朝四時起て三昧座に入る。李子、神田寿子と七時廿分の汽車にて軽井沢二行。九時より村井吉兵衛氏に行。薫子さまに逢て暫時はなして、それより東伏見宮様え参り、良君様に拝謁して、しはらく御咄し申上て退る。十二時帰。暑さ堪られぬ位也。不在中、浦四三子、甘利氏来る。受信 松島靖子、文よす。

*よす（寄す）

八月三十一日 辛未 木曜 天長節、祝日。晴。

朝四時起て、三昧座に入る、六時迄。午三時、李子軽井沢安着の端書着。寿子よりも端書着。新聞に、沈没した軍艦新高の生存たゝ一名、三百の乗組員哀しき犠牲。新高艦長古賀大佐の嬢久子、我校の三年生。園伯の弟副艦長少佐の名も出て居る。午後号外。沈没した新高の艦底に十六名生存者あり、其外に全なしと云。何たるいたましの事なるかな。

（九月）

九月一日 壬申 金曜 晴。88 (度)。

朝四時起。三昧座に入り勤行ス。式百十日、平穩なる此天氣、正午89 (度)、残暑の絶頂也、有かたし。来客、五島善子。

九月二日 癸酉 土曜 晴。88 (度)。

朝四時起。三昧座に入て勤行ス。天雨ならんとして又晴、終日かくして雨ふらす。此夕七時、李子一行軽井沢より無事帰着す。斎藤氏の碑文揮毫ス。甘利氏来る。

九月三日 甲戌 日曜 晴。

朝二時起。三昧座二入りて勤行ス。碑文出来上る。来客、神田寿子。毎夜月清し。竹内きたる。

九月四日 乙亥 月曜 晴。

朝四時半起。三昧座に入りて勤行ス。

九月五日 丙子 火曜 晴。88 (度)。残熱甚し。風ハある。

朝一時起。三昧座に入る。此時、安田善次郎、善三郎氏のくるしみを救うへき仰せ蒙りたり。夫より念仏三昧に入る。来客、神戸早川京子。

九月六日 丁丑 水曜 晴。88 (度)。

朝四時起。三昧座に入る。勤行す。朝八時、職員生徒一同講堂に集る。校長の講演、次、主事 中島先生の講話、畢而宮内氏、此度愈隠退を告られ、送別の演舌あり。其後座を請られる山崎氏の紹介ある。是にて式畢。

○午睡の夢に、虚空に登るハ靈坂の階梯をなすと云事を聞えたり。満月すみわたりたり。竹内氏来る。

九月七日 戊寅 木曜

朝四時起。三味座に入る。揮毫ものす。

九月八日 己卯 金曜 晴。

朝四時起、例の如し。八時三十分より習字教授す。

九月九日 庚辰 土曜 晴。

朝四時起。三味座に入りて勤行如例。来客、堀田伴子さま御出にて、是迄私の信向ふりに付て、御カチを本旨せられぬを大騒に御心配にて、北条彝子さまよりの申付にて、万一此加治をせられぬなれハ、堀田家十八日会も御止めになる様にとの事にて、先々決心、暫時御断申事に相成、安心々々す。夕餐を共にして夜八時過帰られたり。
竹内氏きたる。

*信向（信仰）　　*御カチ（御加持）　　*大騒（大層）　　*加治（加持）

九月十日 辛巳 日曜 晴。

朝四時前起。三味座に入りて勤行ス。三味仏揮毫済。甘利氏来る。

九月十一日 壬午 月曜 晴。85（度）。

朝四時半起。三味座に入りて勤行ス。八時半より授業ス、三回、十二時迄。日川神社秋祭。来客、葉室伯、夕餐を供にして、八時過迄。午下より閑院宮え参り、両殿下に拝謁して、種々御閑談申上而退出。帰途、安田善三郎氏を問ふ。暉子、新築すへてを案内して、実に広大にして可驚。日暮帰。

*日川神社（氷川神社）　　*供にして（共にして）

九月十二日 癸未 火曜 晴。85（度）。

朝四時起。三味座に入りて勤行如例。永野千代子、書画稽古はしむ。
竹内氏来る。

九月十三日 甲申 水曜 晴。

朝四時前起。三味座に入りて勤行ス。

九月十四日 乙酉 木曜 晴。 86 (度)。

朝四時起。勤行如例。朝八時、竹内夫婦来る。自働車にて、予同乗して千駄ヶ谷三島子に行、有約。笹本上人の御講話ありて聴聞す。未亡人かね子さま御悦び、予を迎えられて、裏松千よ子さま、石山吉子さまも御出にて、大く嬉しかりし。昼餐にも逢て三時帰。自働車、笹本上人、九州の谷氏、竹の内夫婦、予も同乗にて。

九月十五日 丙戌 金曜 晴。 85 (度)。

朝四時起。勤行ス。八時廿分授業ス、三時間。夜、甘利氏、寿子来る。

九月十六日 丁亥 土曜 晴。 86 (度)。

予記 浅草地明会。
朝四時起。勤行す。風もなく暑さ堪かたし。午下早々浅草地明会二行。今日秋気講話会二付、本多狛下に逢て聴聞す。四時比帰。

秋気(秋季)

九月十七日 戊子 日曜 晴。 60 (度)。

朝三時起。勤行如例。午下一時開場、帝劇に行。予、もとを連れて、栄子、寿子も。外題、雪の夕暮、院 忠臣講釈薬師寺次郎左衛門、十八番の内ういろう。六時過はね。此朝はしめて涼気六十度、有かたき事也。

竹内氏来る。

ういろう(外郎)

九月十八日 己丑 月曜 晴。 68 (度)。

朝四時半起。勤行ス、如例。八時廿分より授業ス、三時間。午下、有約、三宅たけ子悴の縁談の事二付依頼せらる。御子息八正太郎、今司法参事官、外務参事官也。当年三十六歳也。

九月十九日 庚寅 火曜 雨。

朝四時起。勤行如例。よき雨にて可喜。

九月二十日 辛卯 水曜 雨。

朝四時起。勤行如例。来客、斎藤仁子。昨夜より雨しきりにふりて実金に如し。十分にふりたり。有かたし。

竹内来。

九月二十一日 壬辰 木曜 彼岸入、晴朗。晴。

朝二時起。勤行如例。揮毫ものス。来客、酒井貴美子様、甘利氏、寿子も。朝、榛原え行。扇子もとめたれハ、よき品とんとなくて、漸銀地の分一本を得た、其外たにさく、紺紙など買て行。三越え行。是も扇子なくして帰。

*たにさく(短冊)

九月二十二日 癸巳 金曜 晴。64(度)。

朝五時起。勤行如例。八時三十分より授業三時間畢。揮毫ものス。来客、橋本太吉氏、西川喜代衣の母。朝のさむさ、頓に綿入羽織をきる。夜、竹内夫婦、九州藤本上人の御弟子の谷氏同道にて。此仁、共に弁栄上人の御弟子、御涅槃御臨終まで御付申たる人にて、右上人の御逸話種々承はる。十時頃帰らる。

竹内氏来る。

九月二十三日 甲午 土曜 晴、雨。

朝五時起。勤行済て。

第五回、此朝の夢に赤地の金綱の御打敷を如来御降臨の時に敷くへしと教を蒙りたり。

*金綱(金襴)

九月二十四日 乙未 日曜 彼岸中日。晴。

朝四時起。此朝、予、李子と同しく原町一行院にて勤行して帰。帰途、光円寺ニ参り墓参して帰。大絹本三尺巾豎物に、弁栄上人の御筆になる三昧仏、漸臨写出来り(衍)上りて落款す。閑院宮様え参り宮春仁王殿下の御成年御式ニ付、松魚、扇子に松の絵、裏菊花をかきて御祝ニ献上する。御息所に拝謁ス。此時、黒田茂子様、御子さま光子さま御連にて御目ニかゝり御夕食を戴て帰。

九月二十五日 丙申 月曜 晴。

朝四時起。勤行す。九時三十分より教授する、三時間。

九月二十六日 丁酉 火曜 晴。 予記 閑院宮若宮春仁王様、成年御式。

朝四時起。勤行す。火曜稽古する。

竹内氏。

九月二十七日 戊戌 水曜 晴。

朝四時起。勤行す。

九月二十八日 己亥 木曜 晴。 予記 閑院宮春仁王殿下御成年式ニ付御招待に預り候。橋

本太吉結婚式。田中文学士夜話、変改して芝西心寺にて藤本上人の講話。

朝四時起。勤行す。朝十時半より閑院宮様え参集ス。御客女客のみにて、両殿下拝謁、若宮、
姫宮殿下御成年御式之御祝奉詞ス。御午餐御培食仰付られる。日本食にて殊ニ結構、十三食。

一時過濟、二時退出。北白川宮え参り、内親王殿下御渡欧ニ付御恐悦申上て、夫より芝西心寺
ニ行。九州より藤本上人の講和聴聞する。

芝西心寺ニ、明治四年の春、蛙の合戦ありて、予等、姉公、父と共に見物ニ行。源平ニ成て両
方より戦はしまる。何千疋と云手負、負傷者ハ蛙かおんぼううしてにげて行。寺の下部たち四斗
樽にて此蛙を捨に行。夜の間にも又群蛙集る。大ヒキ蛙也。此寺の事五十年の昔、思ひ出したり。

*御培食（御陪食） *講和（講話） *蛙（蛙）

九月二十九日 庚子 金曜 晴。

朝四時起。勤行如例。藤本上人御講話、三日間也。参詣する。

九月三十日 辛丑 土曜 晴。

朝四時起。勤行如例。

(十月)

十月一日 壬寅 日曜 晴。

朝三時起。勤行如例。午下早々、高田馬場津田氏え行、下部銀を共にして。電車にて高田馬場にてをりる。此時自分持ちたる袋を置忘れて、直に局え行て届ける。局員云、代々木二行車故、直二電話にて聞てくれる。然し電車の下二置たるには、とてもなきもの也ト云。代々木局より袋は有りたり、在中のものよくしらへて、札金廿九円ト十五銭、金縁眼鏡二箇、紙入には名刺もありて一品も不足なしと云。然し是ハ使には渡されぬと云。漸くにして落手致したり。此夜、約ありて三島良子さま、竹内夫婦来られる。夜の事とてゆるく御咄しはつみて十時過帰られたり。

十月二日 癸卯 月曜 晴。予記 北白川宮御息所御渡欧、夜七時三十分御出發。

朝五時起。勤行如例。学校教授する。夜六時半より中央停車場二行。北白川宮妃房子内親王殿下、御渡欧御出發、御見立申上る。実に奉送の方々可驚御人数、御賑々敷、御機嫌よう御出發あらせられたり。

十月三日 甲辰 火曜 雨。予記 我校全生徒、太田遠足、雨にて中止。

朝四時起。勤行如例。昨夜よりの雨にて遠足中止。方々にコレラ発生。魚河岸ハ魚ハ禁止されたり。火曜稽古する。

竹内氏。

十月四日 乙巳 水曜 晴。

朝四時起。勤行如例。

竹内夫婦。

十月五日 丙午 木曜 晴。望夜、明月也。

朝四時起。勤行如例。佐々木氏二行て帰。はしめて袷を着る。天高く気清し。散歩にも妙々也。

(十月六日、七日、記載ナシ)

十月八日 己酉 日曜 雨。 予記 津田栄子、弘英を連れて香港出発。

昨夜よりの大風雨。早起勤行如例。朝九時半、津田栄子、英出発。此天気二付中夭停車場えは不行、李子のみ見立二行。

*中夭停車場（中央停車場）

（十月九日、記載ナシ）

十月十日 辛亥 火曜 晴。 予記 后五時半、帝国ホテル、斎藤良弼、奥村光子結婚披露。

朝の勤行如例。后一時、安田房子、浅草本願寺にて葬儀二付、会葬ス。午後五時半、斎藤良弼、奥村光子の結婚披露会二付、帝国ホテルに行。予、李子と同伴。余興始りたり。来客之大勢、四百人余と云。可驚盛会也。先々結構々々。

十月十一日 壬子 水曜 晴。

朝の勤行如例。

十月十二日 癸丑 木曜 晴。

朝の勤行済て神田新田氏え行。純興此度佐渡の任地え十五日比出立と云のて餞別持参する。それより斎藤良弼氏を問ふ。仁子さま大悦にて、藤田氏に逢て種々奇談を聞く。又嫁さまの荷物、衣類、調度もの見せてもらふ。実によくもこれほともを尽したるものと驚の外無候。昼餐を呼れて、三時より閑院宮様え参り、御息所様に拝謁して、宮様朝鮮御出張の御留守の御機嫌を伺ひて、夕景帰。

十月十三日 甲寅 金曜 晴。

朝の勤行済て、教授、昼迄済。

十月十四日 乙卯 土曜 晴。

竹内氏呼ふ、夜十一時過。

十月十五日 丙辰 日曜 晴。

終日臥。

竹内氏。

十月十六日 丁巳 月曜 晴。

朝の勤行済。この朝、太田実父母来られるので待請たる処、今電話にて、早苗昨日両親と三越行て俄に心地悪くて帰りたるよし、貧血のよしにて臥り居たる二付、今日は御出なきよし承り候。早速に寿子を見舞に、中野太田氏へ行。

新年御題、暁山雲。

十月十七日 戊午 火曜 晴。 予記 \ 午後十時より善光寺十夜念仏、午後二時迄。

朝の勤行済。神嘗祭。来客、土屋秀禾、上野林光院住職長沢徳玄、竹内氏 伝教大師御絵伝二付、校正入。

十月十八日 己未 水曜 雨。 予記 \ 浅草本願寺婦人会追弔会。

朝の勤行済。本日ハ李子五十五回誕生日二付、午後三時比より田中氏、竹内氏を招待して仏教の講演を願ひ、志賀鉄、長谷川千、安田輝、横田縫を仏教に引合すへきと大めに楽しみたる会なれと、李子俄に病気にて、皆さまに逢事も出来ず。来客ハ雨中ながら揃ひて、田中氏コソソソたる御咄しにて、夕餐後、安祥堂にて仏教の御指導ありて、十時比大めに喜びて皆帰られたり。此時、雨ハ漸く止たり。

*コン々々たる(懇々たる)

十月十九日 庚申 木曜 晴。

きのふに引替天晴朗。朝の勤行済。午下、太田小二郎夫婦、早苗、寿子も来る。太田氏始めて面晤す。実人格者たるよき人物也。種々御話して四時比帰。此朝、河鱈子より、主人今朝死去と云電話にて、予、早速弔問二行。今朝三時逝去之由にて、為子さまも大愁、傷御暇乞して帰。今夕六朝麻布本家え御帰りにて発表のよし也。

*六朝(六時)

十月二十日 辛酉 金曜 晴。

朝の勤行済て、教授、昼迄。伝教大師御絵伝にかゝる。

十月二十一日 壬戌 土曜 晴。

朝の勤行済て、伝行大師御絵伝にかゝる。

*伝行大師(伝教大師)

十月二十二日 癸亥 日曜 晴。 予記 観世会、大槻十三、道成寺。

朝の勤行済て、九時半過より久々観世二行、大槻道成寺をみて帰。

十月二十三日 甲子 月曜 晴。

朝の勤行済て、教授、昼迄。神代より書至る。今夜行にて上京、此方御宿をと問合来る。直ニ電報にて断る。今朝太田氏え餞別ものもたして使出ス。

竹内氏来る。

受信 新潟より笹本戒浄上人より絵はかき着。

*はかき(端書)

十月二十四日 乙丑 火曜 晴。

朝の勤行済て、火曜の稽古する。午下一時より宮中え参る。典侍正親町様、大原様ニ御目にかゝり、皇后陛下には御さし支さまにて、けふハ拝謁ハ出来ぬと仰せられたり。拝領の御菓子、梨子、柿等、早速ニ太田小二郎氏えもたせたり。

*御さし支さま(御差支さま)

十月二十五日 丙寅 水曜 晴。

朝二時起。課業如例。来客、安楽寺日善尼、杉山細君。

十月二十六日 丁卯 木曜 雨。

朝二時起。勤行如例。朝、佐々木氏え行て帰。

十月二十七日 戊辰 金曜 雨。
朝の勤行如例。金曜の授業、昼迄。

(十月二十八日、記載ナシ)

十月二十九日 庚午 日曜 晴。 予記 松花会、東神奈川石井氏別荘にて。

朝の勤行済て、九時より、余、李子と同じく新橋駅迄、つゝいて東神奈川駅迄電車にて。それより石井氏別荘に着。当日幹事の方四、五人計前着にて。宅ハさのみならず、庭園ハ八千坪計にて、山あり、眺望広く、富峰全景、暁山雲御題を画にしたる如くなり。絶景実に佳也。其内會員打揃ひて、昼餐に趣工ありて、幹事ハみな児まけに紫袴の塾生にて、拝膳よろしく食事もみな美味にて、沢山にきこしめし、夫より園中余興場あり、両側に。一方ニ、不二詣 薩摩(ざま)と金剛杖、駅鈴と、紳士袴、ガイトウ、帽をかふる、学生 袴に帽、本、かばん、茶店女 赤前かけ、たすき、手拭かぶり、御盆に土瓶、五人ツ、向側にハ五人、みな夫々に、不二詣にハあま酒をのます。一番早きを勝とす。余興趣美実面に面白し。種々遊びに、四時退散。また電車にて帰。

*趣工(趣向) *まけ(髭) *拝膳(配膳) *ガイトウ(外巻) *趣美(趣味)

十月三十日 辛未 月曜 晴。 予記 帝国大学校内に於て、午前十時迄に参る事。学制頒布五十年記念祝典摂政宮殿下御臨場。

朝の勤行済。予、九時より自動車にて大学校正門より入りて楼上に集る。十時三十分、摂政宮行啓成る。此楼上にて拝謁仰付られる。夫より式場に参集する。正面に摂政宮、側に閑院宮、久爾宮、別側、文部大臣鎌田氏、うしろに総理大臣加藤氏をはじめ清浦氏外大臣方。君か代唱歌、摂政宮勅語御朗読、御声の麗しき、大な(る)玉の如し。この御声に感泣せさるものなし。次に文部大臣、総理大臣、清浦氏、順々に祝辞ありて、天皇陛下摂政宮方歳三唱して式全畢。食堂開け、御折詰三重二のみもの二瓶。畢而元の楼上にて摂政宮より、陛下より御下賜なる銀製御紋章入の御杯、文部省より銀のコップ、金のメタル、彰表、東京市ヨリ彰表ヲ、学制頒布五十年史一本を文部省より賜はる。

*久爾宮(久邇宮) *のみもの(飲物)

十月三十一日 壬申 火曜 晴。 予記 三十一日午後二時半より四時半迄芝離宮にて園遊会、

晴雨にかゝはらず、外務大臣内田康哉。

朝の勤行如例。午下一時半より、予、李子と自動車にて、外務大臣内田氏園遊会、芝離宮にて催さる。久々にて御苑の広きを一週して、余興場にて。夫より食堂ニ入て、暫時にして四時前退散す。

*外務大臣(外務大臣) *外務大臣(外務大臣)

(十一月)

十一月一日 癸酉 水曜 晴。後の月、雨にて見えす。

朝の勤行済。午後二時より島尾氏にて甘利氏の稽古はしまる。

十一月二日 甲戌 木曜 晴。

朝の勤行済。夜、甘利氏きたる、寿子も。

十一月三日 乙亥 金曜 晴。予記 修学旅行、夜汽車にて。

朝の勤行済。金曜教授、昼迄。夜十時三十分の汽車にて五年生出發ス。十五夜の月、鏡の如し。竹内氏来る。

十一月四日 丙子 土曜 晴。

朝の勤行済。

十一月五日 丁丑 日曜 晴。

(コノ日、記事ナシ)

十一月六日 戊寅 月曜 晴。予記 午前十時より上野自治会館にて日蓮上人諡号奉戴式、出席。

朝の勤行済。九時半より上野自治会館へ出席す。もはや群集詰かけ、立錐の地もなき盛会也。始、君か代、雅楽、御経自我偈 磯野管長、奉戴文奉読 本多日生、祝詞等 小泉身延山貫主猊下、文部大臣、

宇佐美、犬養大（ママ）。

十一月七日 己卯 火曜 晴。 予記 桃園会、午後一時より小石川植物園にて、出席。
朝の勤行畢る。火曜の稽古する。午下一時より植物園ニ桃園会ニ行、三時半帰。
竹内氏来る。

十一月八日 庚辰 水曜 雨。 予記 若松会、日比谷公園にて。
曇、晴、十時頃より雨になり終日降つゝき（た）り。生徒四年より全部太田え遠足、雨にて大ゐ
にあんしたり。されと一人の病人もなく一同無事帰校、先々安心。予、一時半より若松会ニ行。
日比谷松本楼ニ行、幹事小早川、伊藤静江、香川初音にてよく行とゝきたり。廿人余也。此日
は日比谷の菊を見るつもり、雨にて散歩も出来ず、四時過帰。帰余鳥尾子に行、稽古して帰。
絹本一枚揮毫ス。

*あんし（案じ） *帰余（帰途）

十一月九日 辛巳 木曜 晴。 予記 修学旅行、帰校日。
朝四時起。勤行。修学旅行、六時四十分着、七時過全部無事帰校ス。此時、中野山根あや子、
多田よし子、来客。堀田伴子様、岡村、丹羽の御三人来られ、十七日祝賀会招待の端書書に御
出ニ相成たり。

（十一月十日〜十二日、記載ナシ）

十一月十三日 乙酉 月曜 予記 \ 午前十一時より巢鴨癡兵院え、愛国婦人会。

十一月十四日 丙戌 火曜 晴。

朝の勤行済て、火曜の稽古する。午下五時比より田中氏、竹内氏来られ、安田輝子、齋藤仁子、
志賀鉄千代も来られて、仏教の講話ありて八時過済て帰られる。

十一月十五日 丁亥 水曜 晴。 予記 代々木初台三宅氏行。

朝の稽古済て、午下一時、堀田伴子様御誘引にて、予、李子と自動車にて三宅氏ニ行。竜子さ

ま大ぬに悦はれ、前に藤堂俊子、石川堯子、幸子、志賀、白石菊子在りて、堀田、予、李子とにて、すへてよく準備もとのひて、調理もの好奇をこらしてみな美味也。御主人の心よく頭れたり。紫絹の帛紗地に絵を写して着色も火にあふりかしてよく染出したるとかにて十枚揮毫ス。九時比散会、車にて帰。

*好奇(好奇) *あふり(焙り)

(十一月十六日、記載ナシ)

十一月十七日 己丑 金曜 予記 松花会、上野精養軒にて、教育五十年祝賀会。

(コノ日、記事ナシ)

十一月十八日 庚寅 土曜 予記 別事。

(コノ日、記事ナシ)

*別事(別時)

十一月十九日 辛卯 日曜 予記 甘利氏温習会、鳥尾子にて。

(コノ日、記事ナシ)

十一月二十日 壬辰 月曜 予記 本日より蒲田三島子別墅行。

此日より、予、蒲田三島子の別墅に行。下女もとを供にして。笹本上人も先在て此日より上人の御講和を伺ふ。

*別墅(別墅) *御講和(御講話)

十一月二十一日 癸巳 火曜 晴。

朝四時より別事念仏はしまる。朝御講話もある。昼餐早々御念仏、二時御講話ありて、夕餐済てまたはしまる。夜ハ九時迄座談ある。

*別事(別時)

十一月二十二日 甲午 水曜 晴。
朝四時より昨の如し。夜も同し。

十一月二十三日 乙未 木曜 晴。 予記 山崎一郎、高島董子、結婚披露、御断。
朝四時より夜九時まで。第三日目、段々に如来の御慈悲に感染せらる。

十一月二十四日 丙申 金曜 晴。
第四日目。

十一月二十五日 丁酉 土曜 晴。
第五日目。 天気尤よし。 特別なり。

十一月二十六日 戊戌 日曜 雨、晴。
昨夜より雨催したり。 小雨、又晴。 第六日目。

十一月二十七日 己亥 月曜 晴。
第七日目。 御別事成就す。 此日、皆散会す。

*御別事（御別時）

（十一月二十八日〜三十日、記載ナシ）

（十二月）

十二月一日 癸卯 金曜 晴。
明かたの夢に御霊感あり、六回目也。 如来大なる御姿にて蓮台の上に直立遊はして其うしろに
早苗の植付たるあり。 天樂、殊に近く聞ゆ。

（十二月二日、記載ナシ）

十二月三日 乙巳 日曜 予記 梅若別会。

十二月四日 丙午 月曜 予記 綾小路三年忌。

十二月五日 丁未 火曜 予記 安田善三郎。

(十二月六日〜八日、記載ナシ)

十二月九日 辛亥 土曜 予記 地明会。清水初子七回忌。

十二月十日 壬子 日曜 予記 閑院宮御誕辰。

(十二月十一日、記載ナシ)

十二月十二日 甲寅 火曜 予記 午後、鳥尾子。

十二月十三日 乙卯 水曜 予記 午下、坂本氏。

十二月十四日 丙辰 木曜 予記 午後五時、上野精養軒、山極、三宅結婚披露。

(十二月十五日〜二十一日、記載ナシ)

十二月二十二日 甲子 金曜 予記 仙石子と三条喜美子結婚披露、御断。

(十二月二十三日、記載ナシ)

十二月二十四日 丙寅 日曜 予記 午後五時、帝国ホテル、井上、坊城結婚披露。

(十二月二十五日〜三十一日、記載ナシ)

四月三十日 坂本氏行 往復 向一(迎)一ひも *向ひ一(迎
ひ)一

五月二日 毛利公、築地精養軒え

同 午下より 津田行 往のみ

四日 朝より 山岸行 往返

五日 午下一時半より 常楽寺行 往復

同 七時 迎車

六日 川はた子え行 *川はた一(河鱸)一

し 有楽座 行のみ

七日 午下早々 〔高輪毛利さま

し 鉄道協会 往返

八日 午下早々 浅草本願寺 往復

十日 午下早々 川はた子、帝劇 往復 *川はた一(河鱸)一

十四日 午後 南蔵院行 往復

十五日 午後 宮内省え 往復

十九日 午後早々 上野精養軒 往 春日自動車

廿四日 午下早々 河鱸子え 往復

廿七日 午下一時より 往 春日自動車

廿八日 午下一時より 同気倶楽部 往復

六月 一日より 一時より 往 春日自動車

六時より 精養軒 復 自動車

八月一日より	四日 午後早々	新はし迄	往 *新はし(新橋)
五日	七日 午下三時より	阪本氏え	往復
六日	九日 午下一時より	浅草地明会え	往復
	十一日 午下三時より	河はた子え	往復 *河はた(河鱒)
	十六日	帝劇行	往復
	十七日 午下四時より	阪本氏行	往復
	十八日 午下より	堀田伯行	往復
	十四日 午下四時より	川はた子え	往復 *河はた(河鱒)
	十八日 五時より	阪もと氏え	往復 *阪もと氏(阪本氏)
	廿四日 朝より		往復 春日自動車
	廿七日	東伏見宮様え	往復
	廿八日	東伏見宮、閑院宮	上下
七月一日より	上の精養軒	上下	春日自動車 *上の(上野)
三日	愛国婦人会まで	上下	
二日	東伏見宮より華族会館まで	上	
五日	浅草等一閣	*浅草等一閣(浅草統一閣)	
八日	甘利送り		
九日	帝劇	上下	
同	中元物使		
十八日	堀田伯	上下	
廿日	東伏見宮		
廿六日	客人送り		
十二日	本郷、浅草、買物		
廿七日	佐々木氏より宮内え		
八月一日より	初台志賀氏	上下	
五日	麟祥院、三条告別	上下	

十三日

本郷より牛込河はた迄 上下 *河はた(河鱒)

(新聞記事切抜1「秩父宮御宣賜」)

(新聞記事切抜2「さらば日本国民よ 英皇儲御退国の辞」)